

エマヌエル・トッドへのインタビュー：「私は世界史の過程におけるロシアの役割に注目してきた」

(エマヌエル・トッド氏は型破りな見方で有名なフランス人歴史家・文化人類学者で、多くのセンセーショナルな本の作家である。最近の著書『西洋の敗北』(La défaite de l'Occident)は昨年ロシアでもいくつかの出版社から翻訳出版され、ベストセラーとなった。わが国のジャーナリストのナタリア・ルトケヴィッチがトッド氏をインタビューした。ー Russia in Global Affairs 編集部)

Russia in Global Affairs 2025年1月～3月号、脇浜義明訳

ナタリア・ルトケヴィッチ：「価値観」という言葉が政治的議論で中心テーマとなることが多いです。自由主義世界は価値観の普遍性を断固主張し、他方非自由主義世界は価値観は社会によって異なり独特であると主張して、伝統的な家族的価値観を守り続けます。ある意味ではどちらも政治的レトリックにはまって、自分の殻に閉じこもっているように思えます。あるいは見せかけの論争にすぎないように思えるのです。しかし、近代社会の情報化現象を考えますと、この対立はかなり大きな役割を發揮しています。この見方の違いが世界的対決の性格を決定づけていると言って正しいのでしょうか。

エマヌエル・トッド：価値観の問題は確かに重要ですが、それは世界を揺り動かしている不和や紛争の些細な一部にすぎません。ロシアと西洋の対立、あるいはその他の国家間紛争を見る場合は、価値観ではなく、力関係を見るべきだと思います。私はシカゴ大学教授のジョン・ミアシャイマーのような現実主義者と同じ意見で、世界的紛争の中核は大国対立だと考えています。これにかんがみ、一方ではロシア、他方では米国とその臣下国（私は日本とヨーロッパを米国の同盟国というよりは臣下だと思っています）の間の対立の出発点は、米国の超大国地位の崩壊です。

ソ連邦の崩壊で西側の勝利という幻想が生まれました。実際には西側もずっと前、1960年代半ばに、経済的・文化的衰退に入っていたのです。ライバルのソ連が消えたためにグローバリゼーションが加速し、それが米国産業から力を奪いました。同じことが英国、フランス、ドイツ、そしてある程度日本の経済にも起きました。だから、西洋の力の減退の根本的理由について述べます。生産力の縮小、生産技術者の欠乏、教育制度の低下。教育の低下は、米国では1965年から、フランスでは1995年から始まりました。

ナタリア・ルトケヴィッチ：どうして1965年と1995年なのですか。

エマヌエル・トッド：どちらの年も教育システムが変化した重要な節目なのです。1965年の米国で初等中等教育法が制定されました。それは（当時の「貧困との戦い」政策と結びついて一訳者）教育へのアクセスを広げるという意味では正しい法律でした。しかし、大学進学適正試験（SAT）によれば、まさにその年から大学入学志願者の学力が、数学、口語英語、文章英語で、落ち始めたのです。

フランスでは、リセ（高等学校）卒業者の数は、どの社会グループでも、1995年まで増加していました。しかし、1995年以後は高卒者の数が減少し始め、その後また増加しました。二度目の高等学校学習者の増加は知的水準が上昇したからではなく、試験が易くなったからです。

この現象が引き金となって生じたのが、社会の再階層化です。不平等の深化とエリートの特別扱いが促進されたのです。以前は、大学入試審査は同じ条件で、学力だけで審査されていたのに、新入学審査委員会は受験生がどのリセを卒業したかを考慮し、出身校で学力を判断するようになりました。

ナタリア・ルトケヴィッチ：では、問題は教育施行当局にあるというのですね。

エマヌエル・トッド：ある程度はそう言えます。しかし、問題は、このことが、結局、西洋の力の低下——かつての大国の柱の徐々の浸食の背後にある根本的理由の一つにつながるのです。まず第一に、プロテスタント倫理（英国、ドイツ、米国、スカンジナビア等々）と教育、規律、努力というその価値観が次第に崩れていきました。

私は『西洋の敗北』の中で、西洋を、世界の他の国々を搾取する能力の限界に達した文明として描きました。西洋人は中国人労働者やバングラディッシュの子どもの安価な労働力に依存して生活してきました——つまり、他者を容赦なく搾取して繁栄してきたのです。西洋はその特権的地位を維持に懸命ですが、もう他の世界はそれを許す気はなく、反抗するようになりました。

だから、世界的対立は価値観の対立というより、力関係や搾取関係の視点から見べきです。しかし、同時に、現体制（西洋支配体制）が価値観を武器として使っていることを見落としてはいけません。

ナタリア・ルトケヴィッチ：自由主義的あるいは保守主義的価値観を称賛するスローガンが、それが伝道される社会の現実には、どの程度対応していると思いますか。

エマヌエル・トッド：自由主義的民主主義や「西洋価値観」は西側の公的説法の不可欠な要素です。でも、それは対外的に、つまりまったく無関係な聴衆に語りかけているのです。何だったら、単なる輸出品と言ってもよいでしょう。しかし、私たち西洋社会では、私たちのいう民主主義が大変な危機に陥っていることを、識者が語っています。米国でトランプの台頭、フランスでは保守、国家主義、ポピュリズムを標榜する国民連合の人気上昇、ドイツでは極右「ドイツのための選択」の台頭などです。西洋民主主義の弱体化の要因は内部的・内生的であることも分かっています。

確かに、ある程度の個人的自由は残っています。例えば、私は自分の考えを自由に話したり書いたりすることができますし、意見を表現したかどで投獄されることはありません。もっともそのために私をロシアのスパイと決めつける人々がいますが。しかし、本を出版できたし、しかもよく売れています。これはフランスがまだ多元的共存国家で、国民が政府批判を表現できる国であることを示しています。

つまり、一定レベルの反体制思想の存在が容認されています。もっとも、私は公的テレビ放送ではペルソナ・ノン・グラータ（好ましくない人物）です。これは、自国を言論の自由の擁護者と位置づけて、他国、とりわけロシアに説教するフランスとしては、あるまじきことです。

反対陣営（ロシア）の価値観についてですが、ロシアが西洋への宗教的レジスタンス、東方正教会の復活を狙っているという西洋で広まっている見解には、反対です。そもそもロシアで共産主義が成立したのは、1917年のロシア革命の前に東方正教会の力が衰えていたからです。これはフランス革命に関しても同じで、1789年の革命が可能だったのは、1730～1789年にカトリック教会が危機に陥って力をなくしていたからです。私は保守的宗教同盟を描く試みに敵対するつもりはありませんが、現在の世界的対立の本質はそれとは異なる視点で見えています。

私はロシアの国家類型を「権威主義的民主主義」と表現したが、ロシアの国際的位置づけは、私の見解では、ロシアの中心的価値を反映している——国家主権という理想を。従って、現在正面衝突している二つの中心的価値観は、一方は米国主導のグローバリゼーションという価値観と、他方はロシアが具象化している国家主権という価値観です。

この状況から大変奇妙な逆説的現象が生まれます。私はフランス国民として、主権国家的独立性を失い外国のしもべとなっている社会でかなり高い水準の自由な暮らしをしています。他方、ロシア国民は、限定された自由しかありませんが、彼の国は主権国家なのです。問題は、どちらが本当に自由か、私かロシア国民か、です。これはまだ解けていないなぞなぞです。

ナタリア・ルトケヴィッチ：ロシアでは今「世界多数派」という言葉が非西洋を表す言葉として広く使われています。しかしそれが指示するスペースはあまりにも広く、異種混合的で、多くの対立がくすぶり、また対立が起きる可能性を秘めています。それでも、西洋以外の国々には何か共通性があると言えるのでしょうか。何か統一因子のようなものがあるのでしょうか。伝統的なクロス・カルチャーの価値観があると想定して正しいのでしょうか。どのみち、伝統は国ごとに多様でしょう。

エマヌエル・トッド：西洋だって同質的ではありません。『西洋の敗北』の中で、現在西側を形成している国々に歴史的に存在してきた家族形態と政治形態の差異を詳説しました。例えば敗戦国ドイツと日本です。両国は米国から自由主義的民主主義を押し付けられましたが、どちらの国でもそれは自然な形で発展しませんでした。つまり、今日の西側は米国の指導と圧力で纏まっているのです。もう一つの要因は、グローバリゼーションからの利益配当です。米国への従属と他の世界の搾取が、西側メンバーの身分証です。

他の世界、いわゆる非西洋に関しては、巨大な多様性があります。よく比較される非西洋大国のロシアと中国は、まったく異なった国で、私の見解では、比較できない体制の国です——ロシアは権威主義的モデルに近く、中国は全体主義モデルに近い国です。アラブ世界はバラバラです。インドの民主主義はヒンズー教徒多数派、大きなイスラム教スンニ派マイノリティ、小さなキリスト教コミュニティの独自の組み合わせです。アフリカは独自の伝統と文化をもつ別世界です。最後にブラジルですが、BRICS加盟国としてロシアと中国の戦略的パートナーとなっていますが、イデオロギー的には西側に近いです。あなたが「世界多数派」と呼ぶこの広範で異種混合的な世界を繋ぐ唯一の糸は、西側帝国の搾取の鎖を振り切りたいという意図です。

この世界多数派が出現したのは、西側大国が、かつての偉大さという妄想に執り付かれて、世界的覇権を維持しようとするどたん場の悪あがきを始めたことへの反応としてです。ロシアが米国の一極支配への体制への反乱に立ち上がり、「世界の王侯たち」を王座から引きずり降ろそうとしたことから、それに共鳴する形で「世界多数派」が形成されました。それまで、誰も超大国に逆らえるとは思っていなかったし、米国の反旗を翻す国はなかった。しかし、徐々に、米国への服従を拒否する人々が増えてきて、世界多数派が形成されていきました。その過程に私はわくわくしました。歴史の歯車が再び動き出したのです！

概して、私は世界史の過程におけるロシアの役割に注目してきました。共産主義時代のロシアは世界史のエンジンでした。現在もまたその役割を担い、規模の大きな国の主権（この点を私は強調します。すべての虐げられた国ではなく、大きな国の主権です）を擁護する上で素晴らしい決意を表明しています。また、ロシアは西洋の LGBT イデオロギーを否定する国々を惹きつける重心となっています¹。LGBT 問題は自由主義的民主主義の境界をはるかに超えて、国際関係で中心的話題となっています。

ナタリア・ルトケヴィッチ：その点をもう少し詳しく説明してくれませんか。

エマヌエル・トッド：私はフェミニズムに関する本²を執筆しているとき、性的マイノリティの権利の進展について詳しく調べました。そのとき、その問題が地政学にとって中心の問題になっていることを発見しました。だから、次の著作で地政学を取り上げる決心をしたのです。西洋は驚くほど無知で、自分たちの LGBT イデオロギーが他の世界で自分たちが期待する形でとらえられていないことが分らなかったのです。この周囲の世界に関する西洋の無知が、世界という舞台上でロシアが保守勢力であるという位置づけへの道を開いたのです。西洋の LGBT イデオロギーに対する世界の抵抗は、西洋が予測したより強かったのです。それは性的マイノリティの権利擁護以上の問題なのです。性的マイノリティはどこの社会でも昔から存在してきました。彼らが人間らしく平和に暮らす権利があるのは当然だと思います。しかし、LGBT という頭字語の T は性的マイノリティの権利擁護とはまったく異なる性質の現象を表示しています。トランスジェンダーリズムは基本的に生物学的現実を否定する主張に等しくなります³。私は文化人類学者として、人はジェンダーを変えることができるという主張は一種のニヒリズムで、現実逃避だと宣言します。このニヒリズムが現代西洋を襲って、LGBT イデオロギーを現代西洋の宗教的信条にしています。

西洋の期待に反して、このイデオロギーはほとんど一般的に拒否され、その急進性に恐怖して西洋社会の真似をするのを否定する社会の連合を促進しています。

この生物学的現実をゆがめることに反対し、西洋のニヒリズムを受け入れない国や社会にとって、ロシアが引力の一極となっているのです。

ナタリア・ルトケヴィッチ：あなたは『最後の転落：ソ連崩壊のシナリオ』(La chute finale: Essai sur la décomposition de la sphère Soviétique, 1976) で、ソ連の崩壊を人口と労働生産性の統計から予測しました。その論法を現代ロシアと他の大国に当てはめると、どうなりますか。

エマヌエル・トッド：私にソ連崩壊を予測させたパラメータは1970～1974年の乳幼児死亡率の上昇と、その後の政府による統計発表の中止です。乳幼児死亡率は一国の医療状態だけでなく、社会福祉一般を測る指標の一つです。2020年、ロシアの乳幼児死亡率は1000人の新生児出産につき4.4人でしたが、米国はそれより高く、5.4人でした。『西洋の敗北』の中で様々な人口的及び経済的指標を使いましたが、乳幼児死亡率は基本的指標でした。2023年には米国の乳幼児死亡率が再び上昇に転じました。

ナタリア・ルトケヴィッチ：民主主義の性格が変化しています。これまでは民主主義は一般国民の意見で政権の正統性を確保する手段で、法的に権力を移行する手段でしたが、今では現権力の現状維持する手段、現権力を脅かす変化を防ぐ手段となりつつあります。どの国でも法規制や情報の操作が選挙の不可分の一部となっています。いったいどうなるのでしょうか。

¹ 原注：2023年11月30日、ロシア連邦の最高裁は LGBT 運動を過激派と断じ、その活動を禁じる判決を出した。

² 原注：Où en sont-elles ? Une esquisse de l'histoire des femmes 『彼女たちはどこにいるのか？女性史のスケッチ』2022)

³ 訳注：一部だが、両性生物、性的転換する生物も存在するので、オス・メスは生物学現実ではあるが、その区別が絶対的生物学的現実とは言えないのではないかと。

エマヌエル・トッド：もう私たちは民主主義の中で生活していないと、私は思っています。2008年に私は『デモクラシー以後』(Après la démocratie)と題する本を著しました。2005年にフランスは国民投票でEU憲法に反対しましたが、政府は国民投票の結果を無視して、リスボン条約を採択しました。これは民主主義がなくなったという明確なサインです。現在のフランスは厳しい政治的危機にあり、政府なんかなくても、人々が普通の生活をしているのが、この事実を物語っています。

民主主義がなくても生活は続きます。リベラル寡頭政治——まさにこれが現在の政治形態です——という概念を使えば、今が民主主義とは異なるシステムであることがはっきりします。

私が問題とするのは、西洋を成功させた要因のすべてが衰退していることです。とりわけ、プロテスタント主義の衰退です。(現代の福音主義はプロテスタント精神とは異質なものと、私は見えています)プロテスタント主義が普通教育、集团的自己支配、強い個人的道徳意識を発展させたのです。今は、宗教が崩壊したけれど、その後に見えたのは、私が「宗教性のゾンビ形態」と名付けたもの、つまり世俗的市民信仰です。今は「ゼロ宗教」段階で、もはや集团的信仰は跡形もありません。

私は西洋を道徳的及び社会的資本を使い尽くした文明と見ています。エネルギー資源の枯渇を心配する声は多いですが、私は宗教的基盤から受け継いできた社会的・道徳的資源の枯渇を強く心配しています。中世時代に遡る宗教的遺産は西洋の優位性を育てた一種の埋蔵燃料でした。その資源が枯渇したのです。西洋社会のアトム化、高齢化、生殖能力問題(人間と農業)、脱産業化、集団行動ができなくなったこと——これは宗教の衰退によってもたらされた——などが、私の懸念と悲しみのもとです。私も西洋人ですから。私の家系は英国、フランス、米国と繋がっています。それらの国が衰退するのを見るのはつらいです。

しかし、おそかれはやかれヨーロッパはその運命を受け入れなければなりません。いつまでも米国の臣下にいるわけにはられません。ヨーロッパの国々は自由と責任に不慣れになってしまっています。自由というのは容易なことではありません。現在では、全体主義を経験し、ヨーロッパにとって特別に重要な意味を持つ二つの国、ドイツとロシアの関係改善を想像するのは非常に難しいけれど、私には想像できます。また、ヨーロッパの3人組——ドイツ、イタリア、フランスの復活も望ましい。3人組が結束すれば、現在英国、スカンジナビア、ポーランド、ウクライナなどを軸にして臣下世界を作ろうとしている米国の支配から、ヨーロッパを切り離すことができるでしょう。